平　林　遺　跡

序　　文

ゆとりと豊かさを目指すことが重要になってきたなかで、地域住民の間では身近な地域の個性豊かな風土や歴史的な文化財の保護・活用の取り組みへの気運が高まっています。

しかし、その一方で道路建設や住宅造成など都市化の波が地方にも押し寄せ、大規模なほ場整備などの各種事業も年を追うごとに激化しており、文化財は年々破壊され、消滅の危機にさらされることが多くなってきております。なかでも、土地との結びつきの強い埋蔵文化財は、各種の開発により常に破壊される恐れがあることから、当教育委員会では開発部局等に遺跡の所在を周知徹底するとともに、開発との関わりが生じた場合には重要な文化財を積極的に保護することに努めてきております。

本書は主要地方道大衡落合線道路改良事業に先立って実施した平林遺跡の発掘調査報告書です。今回の調査により遺跡の性格を解明する上で貴重な成果が得られました。こうした成果が広く県民の皆様や各地の研究者に活用され、地域の歴史解明の一助になれば幸いです。

最後に、遺跡の保護に理解を示され、発掘調査に際して多大なるご協力をいただいた関係機関の方々、さらに実際の調査にあたられた皆様に対して、厚く御礼申し上げる次第です。

平成20年３月

宮城県教育委員会

教育長　佐々木　義　昭

例　　言

1．本書は宮城県仙台土木事務所との協議に基づき実施した、「主要地方道大衡落合線道路改良事業」に伴う「平林遺跡」の発掘調査報告書である。

2．調査は宮城県教育委員会が主体となり、宮城県教育庁文化財保護課が担当した。

3．発掘調査に際しては、大衡村教育委員会からご協力を賜った。

4．本書の第１図は、国土交通省国土地理院発行の「七ツ森」「吉岡」の縮尺1／25,000の地形図を複製して使用した。

5．測量原点の座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標第Ｘ系による。

6．本書で使用した遺構略号は以下の通りである。遺構番号は遺構の種別に関わらず、調査の際に付した番号を通し番号で用いている。

SI：竪穴住居跡　SA：柱穴列　SB：掘立柱建物跡　SD：溝跡　SE：井戸跡　SK：土壙跡

7．土色の記載にあたっては『新版　標準土色帖　1994年度版』（小山・竹原1994）を使用した。

8．遺構の方向は「Ｎ－23°－Ｗ」と表記した場合、座標北に対し西へ23°偏していることを表す。

9．遺構平面・断面図にはそれぞれスケールを付しているが、縮尺は原則として以下の通りである。

調査区全体図：1／1000　遺構配置図：1／200・1／250

竪穴住居跡・溝跡断面・井戸跡・土壙跡：1／60　掘立柱建物跡：1／80

10. 遺物図版にはそれぞれスケールを付しているが、縮尺は原則として1／3で、土製品・鉄製品・一部の陶磁器のみ1／2である。

11. 遺物実測図では土師器の黒色処理部分はスクリーントーンによって表現した。

12. 遺構・遺物の整理は初鹿野博之が行った。

13. 本書の執筆・編集は、調査担当者の協議の後に初鹿野博之が行った。

14. 本遺跡の調査成果については、すでに文化財保護課ホームページなどでその内容の一部を公表しているが、本書と内容が異なる場合は、本書がこれに優先する。

15. 発掘調査の記録や出土品は宮城県教育委員会が保管している。

16. 陶磁器の産地や時期については、多賀城市埋蔵文化財センターの千葉孝弥氏にご教示いただいた。

目　　次

第Ⅰ章　調査に至る経緯……2
第Ⅱ章　遺跡の概要と歴史的環境……2
第Ⅲ章　発掘調査……4
　1．調査の方法と経過……4
　2．発見された遺構と遺物……4
　　A　古代
　　B　中近世
　　⑴　掘立柱建物跡・ピット群
　　⑵　溝跡　⑶　井戸跡
　　C　その他の遺構・遺物

第Ⅳ章　まとめ……22

参考文献
写真図版

調　査　要　項

遺 跡 名：平林遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号：No.26029　遺跡記号：RH）
所 在 地：宮城県黒川郡大衡村大衡字平林　地内
調査原因：主要地方道大衡落合線道路改良事業
調査主体：宮城県教育委員会
調査担当：宮城県教育庁文化財保護課
調 査 員：確認調査　佐藤則之　須田良平
　　事前調査　菊地逸夫　佐藤貴志　志間貞治　尾形祐之　初鹿野博之
調査期間：確認調査　平成18年５月９日
　　事前調査　平成19年５月７日～６月18日
調査面積：確認調査　約223m^2
　　事前調査　約2000m^2
調査協力：大衡村教育委員会

第Ⅰ章　調査に至る経緯

本書は「主要地方道大衡落合線道路改良事業」に伴って、平成19年度に実施した大衡村平林遺跡の発掘調査報告書である。この工事は、黒川郡大衡村大衡地内の国道４号線と仙台北部中核工業団地を結ぶ道路建設工事で、ルート上に周知の遺跡である平林遺跡がかかることから、平成17年度に宮城県教育委員会と宮城県仙台土木事務所が協議を行った。それにより、工事が遺跡に与える影響が大きいと判断したため、平成18年５月９日に遺跡範囲や性格を把握するための確認調査を実施した。約2500m^{2}を調査対象として、７本のトレンチ（合計約223m^2）による確認調査を行った結果、竪穴住居跡・溝跡・井戸跡・ピット等が発見された。そのため、再び宮城県仙台土木事務所と協議して事前調査の実施を決定し、平成19年５月７日から調査を開始した。

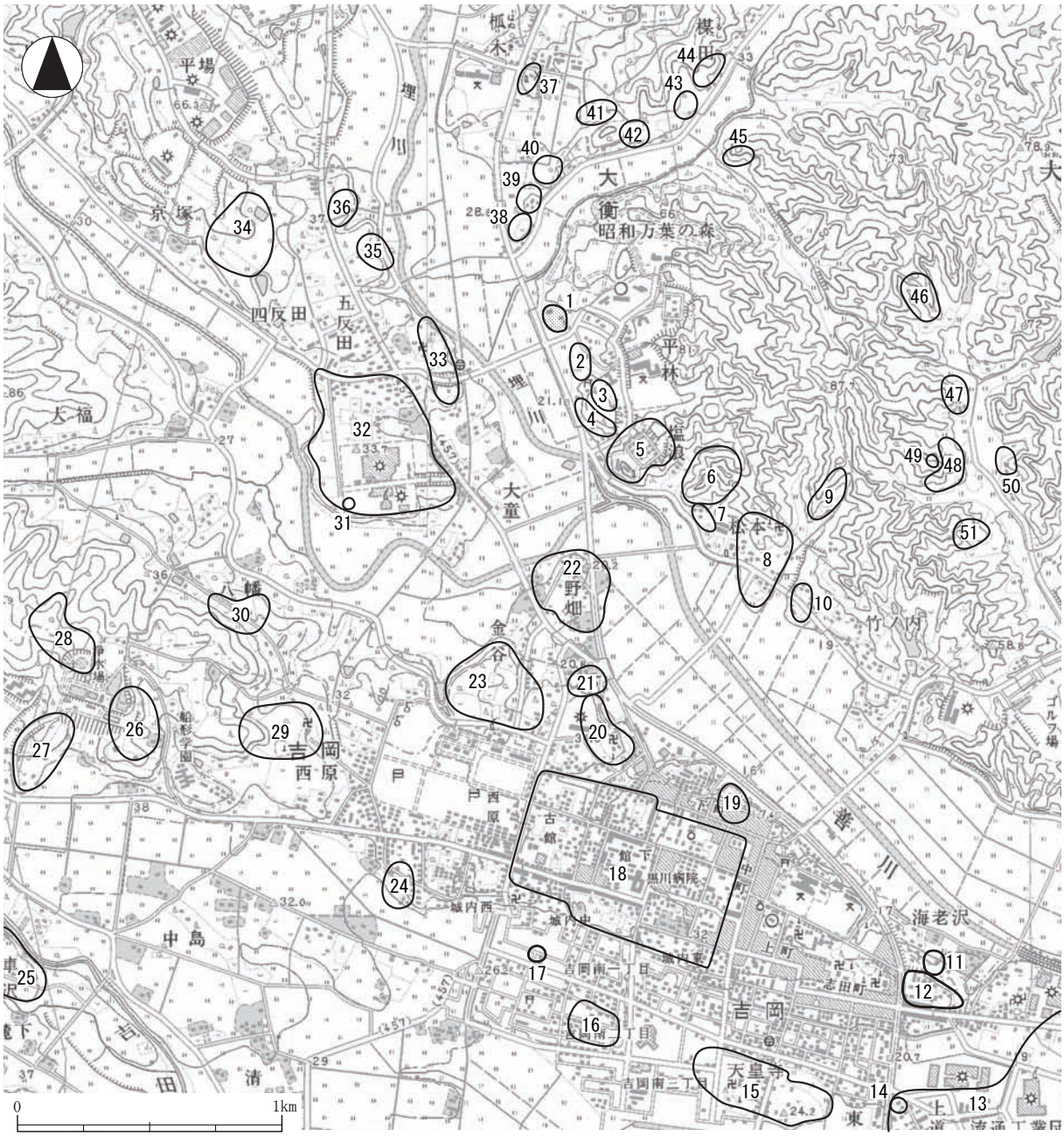
第Ⅱ章　遺跡の概要と歴史的環境

平林遺跡は宮城県黒川郡大衡村大衡字平林にある。村役場の西方約300m、国道４号線の東側に位置し、かねてから縄文時代と古代の複合遺跡として知られていた。大衡村の大部分は大松沢丘陵と呼ばれる丘陵部にあたり、村の南側と国道４号線沿いには、吉田川とその支流の善川や埋川によって沖積地が形成され、河岸段丘が発達している。平林遺跡は埋川の東岸、南西に延びる丘陵の端部に位置し、標高は24～29mである。周辺の段丘上や丘陵麓・斜面には、縄文時代から近世にかけて多くの遺跡が分布する。ここでは、今回の調査と関連する古代・中近世の歴史的環境について概観しておく。

古代では官衙、集落跡などの遺跡の調査が行われている。一里塚遺跡（大和町）では８世紀後半から９世紀初頭頃の官衙施設と考えられる倉庫跡などが検出され、黒川郡衙の可能性が指摘されている。また、その南には外郭に区画施設を伴う集落の存在も判明している（宮教委1999ほか）。中峯Ａ遺跡・中峯Ｃ遺跡（大和町）からは竪穴住居跡や掘立柱建物跡などが検出され、９世紀の集落遺跡とされている（宮教委1985）。亀岡遺跡（大衡村）からも９世紀初頭前後の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土器焼成遺構などが検出されている（大教委1995ほか）。

鎌倉時代になると、大衡村域は北条得宗家の家臣であった渋谷氏・児玉氏の支配下に入り、以後その一族が領主となる（『大衡村誌』）。中世の遺跡の調査例は少ないが、同じ黒川郡の大和町・富谷町・大郷町も含めて、紀年銘のある石碑・経筒などが知られている。平林遺跡の西方約２km にある大福寺跡には、嘉暦二年（1327年）銘のある板碑が存在する。また、南へ約5.7km の富谷町ニノ関にある館山経塚からは、永和二年（1376年）の銘を持つ青銅製経筒が出土している（『富谷町誌』）。中世末期には、渋谷氏系の大衡氏の居城とされる大衡城・古城館跡が平林遺跡の南に存在する。

江戸時代になると黒川郡は仙台藩領となる。元和二年（1616年）に伊達政宗の三男宗清が下草古城（大和町鶴巣下草）から吉岡城（大和町吉岡）に移転し、城下町が形成される。同じく下草から吉岡に移転したとされる天皇寺の周辺からは、17世紀初め～18世紀代の掘立柱建物跡・井戸跡などが検出されている（宮教委1990）。その他に、旧大衡役場前遺跡からは近世の区画溝・掘立柱建物跡などが検出されている（宮教委2007）。



No.	遺跡名	種別	時代	No.	遺跡名	種別	時代	No.	遺跡名	種別	時代
1	**平林遺跡**	散布地	縄文・古代	18	吉岡城跡	散布地・城館	縄文・近世	35	小沓掛遺跡	散布地	縄文晩
2	八幡神社北遺跡	散布地	縄文	19	安楽院遺跡	散布地	縄文中・後	36	小沓掛B遺跡	散布地	縄文中・後
3	八幡神社遺跡	散布地	縄文	20	中興寺遺跡	散布地	縄文晩	37	大衡中学校東遺跡	散布地	縄文
4	八幡神社南遺跡	散布地	縄文	21	石神沢遺跡	散布地	縄文晩・平安	38	柧木A遺跡	散布地	縄文
5	大衡城跡	城館・散布地	縄文・中世	22	旧大衡役場前遺跡	集落	古代・近世	39	柧木B遺跡	散布地	古代
6	古城館跡	城館	中世	23	金谷遺跡	散布地	縄文中～晩	40	柧木C遺跡	散布地	縄文
7	松本B・C遺跡	散布地	古代	24	南金谷中遺跡	散布地	縄文	41	柧木D遺跡	散布地	縄文
8	松本遺跡	散布地	縄文・古代	25	窪遺跡	散布地	縄文中	42	長原A遺跡	散布地	古代
9	寺沢遺跡	散布地	古代	26	中峯A遺跡	集落	縄文・平安	43	長原B遺跡	散布地	縄文
10	要害遺跡	散布地	古代	27	中峯B遺跡	集落	縄文早・前・弥生・古代	44	長原C遺跡	散布地	古代
11	海老沢遺跡	散布地	縄文中	28	中峯C遺跡	集落	平安	45	鐙沢遺跡	散布地	縄文
12	糸繰遺跡	散布地	縄文中・古代	29	一ノ坂遺跡	散布地	縄文中・古代	46	奥田金沢遺跡	散布地・製鉄	縄文前・後・古代
13	一里塚遺跡	集落・官衙	縄文・奈良～中世	30	中山遺跡	散布地	縄文	47	熊ノ沢遺跡	散布地	縄文
14	一里塚	一里塚	近世	31	亀岡古墳	古墳	古墳	48	前沢A遺跡	散布地	縄文・古代
15	天皇寺	集落	縄文・平安・近世	32	亀岡遺跡	散布地	縄文中・晩・古代	49	前沢B遺跡	五輪塔	
16	東新熊野堂遺跡	散布地	縄文・古代	33	大童遺跡	散布地	縄文	50	五十沢遺跡	散布地	縄文・古代
17	車遺跡	散布地	古代	34	四反田遺跡	散布地	縄文早・前	51	苗代沢遺跡	散布地	縄文・古代

第１図　平林遺跡と周辺の遺跡

第Ⅲ章　発掘調査

１．調査の方法と経過

今回の調査区は南西に緩やかに下る傾斜地となっており、平成18年５月に実施した確認調査の結果をもとに、事前調査が必要とされた約2500m^{2}を対象とした。

発掘調査は平成19年５月７日から開始した。調査区を遺跡の地形や道路などによる区画から、便宜的に１区から４区に分け（第２図）、この中で遺構が密に存在すると予想された１区から３区については全面調査を、４区についてはトレンチによる確認調査を行った。その結果、４区は大きく削平を受けており、一部に残る旧地形からも遺構が検出されず、しかも傾斜が急であることから確認調査のみに留めた。

１区～３区は重機による表土除去の後、遺構確認を行い、古代の竪穴住居跡、中近世の掘立柱建物跡、溝跡、井戸跡、ピット群などを検出した。これらの遺構の精査・実測を行い、６月18日ですべての作業を終了した。最終的な調査面積は約2000m^{2}である。

調査区内のグリッドは、２点の工事用基準杭（第２図の基１と基２）を結ぶ線を基線とし、基１を原点とする３ｍ方眼で設定した。基準杭の国家座標は次の通りである。

・基１：Ｘ＝－170571.967　Ｙ＝4117.362

・基２：Ｘ＝－170524.968　Ｙ＝4177.406

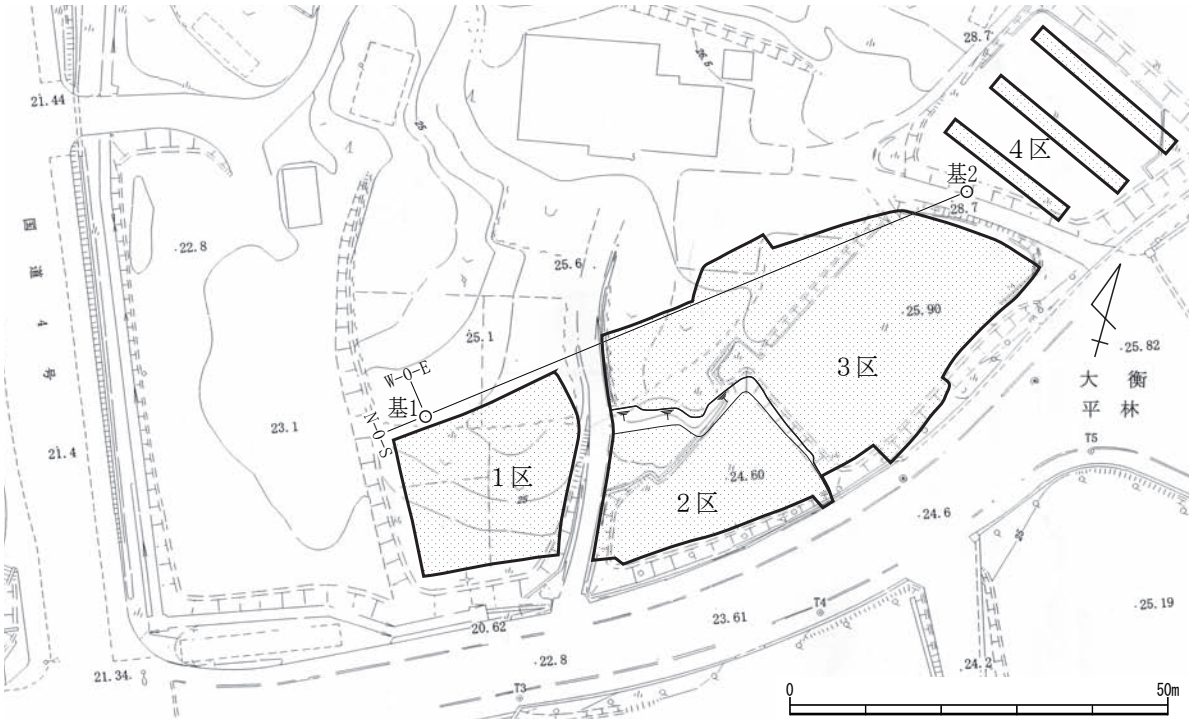
平面図中の地区割りでＳ18、Ｅ18などの表記は、基１から南に18ｍ、東に18ｍに位置にあることを示している。なお、平面図のグリッド北は国家座標北に対し西へ38°03′偏している。

遺構平面図・断面図は縮尺1／20で、調査区平面図は縮尺1／200で作成した。写真はデジタルカメラと35mm モノクロフィルムで各遺構を撮影し、一部の遺構と調査区全景は６×７モノクロフィルムでも撮影した。

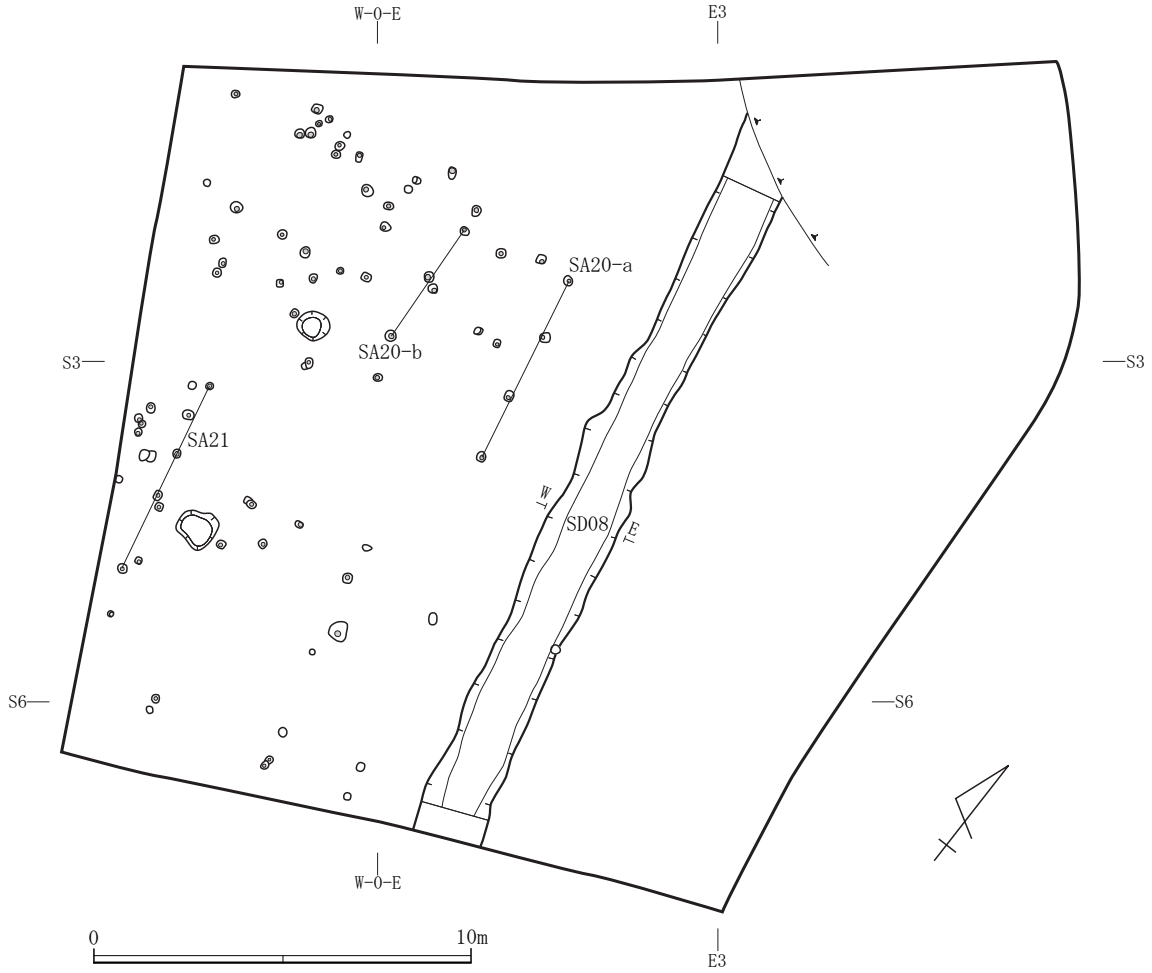
２．発見された遺構と遺物

各調査区の検出遺構は第３図・第４図に示した通りである。１区は柱穴列３本、溝跡１条、ピット群が検出された。２区は開田の際に大きく削平されており、南側で少数のピットが検出されたのみであった。３区は、東側は削平を受けていたが、中央から西側にかけて遺構の分布が密に認められ、竪穴住居跡１軒、掘立柱建物跡７棟、溝跡２条、井戸跡３基、土壙１基、ピット群が検出された。遺物は土師器、須恵器、鉄製品、陶磁器、縄文土器、石器などが整理用コンテナで約４箱出土した。

これらの遺構・遺物の多くは古代と中近世に大きく分けられることから、ここでは各時代に分けて説明する。

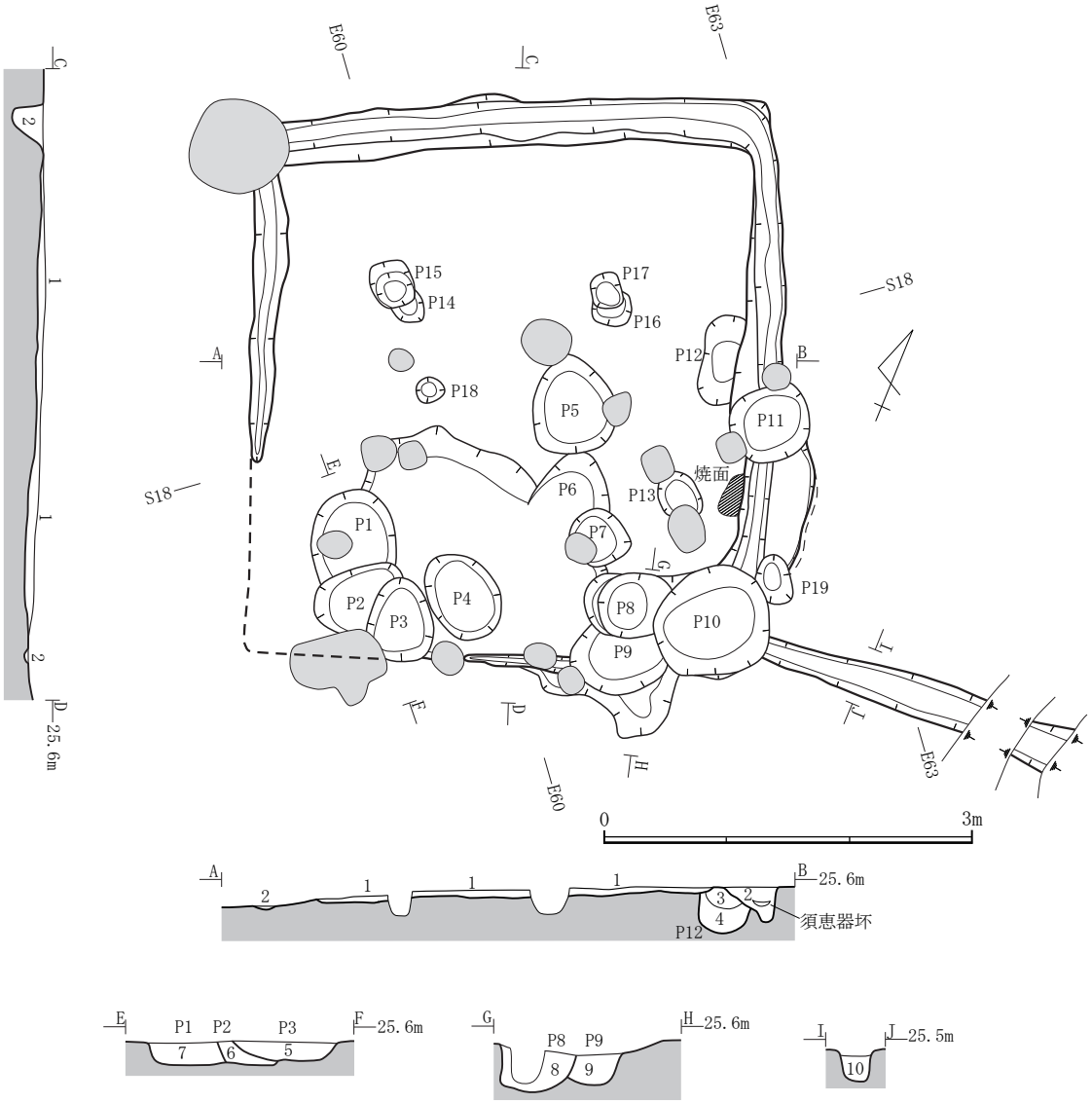


第２図　調査区の位置（1／1000）



第３図　１区遺構配置図（1／200）

第４図　２区・３区遺構配置図（1／250）



層	土　色	土 性	備　考
1	暗褐(10YR3/3)	シルト	地山ブロック小・焼土粒をわずかに、炭化物を少量含む。しまり弱。
2	黒褐(10YR2/3)	シルト	焼土粒をわずかに含む。しまり弱。周溝堆積土。
3	褐(10YR4/4)	シルト	炭化物・焼土ブロックを多量、地山ブロックを少量含む。しまり強。P12堆積土。
4	黒褐(10YR2/3)	シルト	焼土ブロック・粘土ブロックを少量、地山ブロックを多量含む。しまり強。P12堆積土。
5	褐(10YR4/4)	シルト	焼土粒・炭化物を多量、地山ブロック小を少量含む。P3堆積土。
6	黒褐(10YR2/3)	シルト	焼土粒・炭化物を少量、地山ブロック小を中量含む。P2堆積土。
7	黒褐(10YR2/2)	シルト	地山ブロックを多量、焼土粒・炭化物をわずかに含む。P1堆積土。
8	黒褐(10YR2/2)	シルト	焼土粒・炭化物・地山ブロック小を少量含む。P8堆積土。
9	暗褐(10YR3/3)	シルト	焼土ブロック・炭化物を非常に多く、地山ブロックをやや多く含む。P9堆積土。
10	黒褐(10YR2/3)	シルト	焼土粒・炭化物・地山ブロック小を少量含む。外延溝堆積土。底面付近に非常に薄くやや明るい層があり、溝使用時の堆積と考えられる。

第５図　SI01竪穴住居跡（1／60）

A　古代

【SI01竪穴住居跡】（第５図～第７図）

〔位置・重複〕３区中央部南東寄りにあり、SB25掘立柱建物跡やピットと重複し、これらより古い。

〔規模・平面形〕東西約4.3m、南北4.6m のほぼ正方形を呈する。削平を受けており、南西部は床面

付近が残るのみである。

〔方向〕東壁でN－23°－Wである。

〔堆積土〕１層認められ、暗褐色シルトで、残りの良い部分でも厚さ５～10cm 程度である。自然堆積と考えられる。

〔床面〕地山をそのまま床面にしたと考えられる。住居の南半部には多数の土壙が掘られ、床面が壊されている。

〔カマド〕東辺やや南寄りに焼面が検出され、この付近にあったものと考えられる。

〔柱穴〕位置的にP14～P17が主柱穴の可能性がある。長軸30～40cm、短軸25～35cm の不整な円形もしくは隅丸方形を呈し、深さは床面から20～40cm で、堆積土はいずれも炭化物を多く含む黒褐色シルトである。柱痕跡は認められなかった。P14とP16、P15とP17が対になっており、住居の建て替えが行われたと考えられる。南側で対応するピットは検出されなかった。

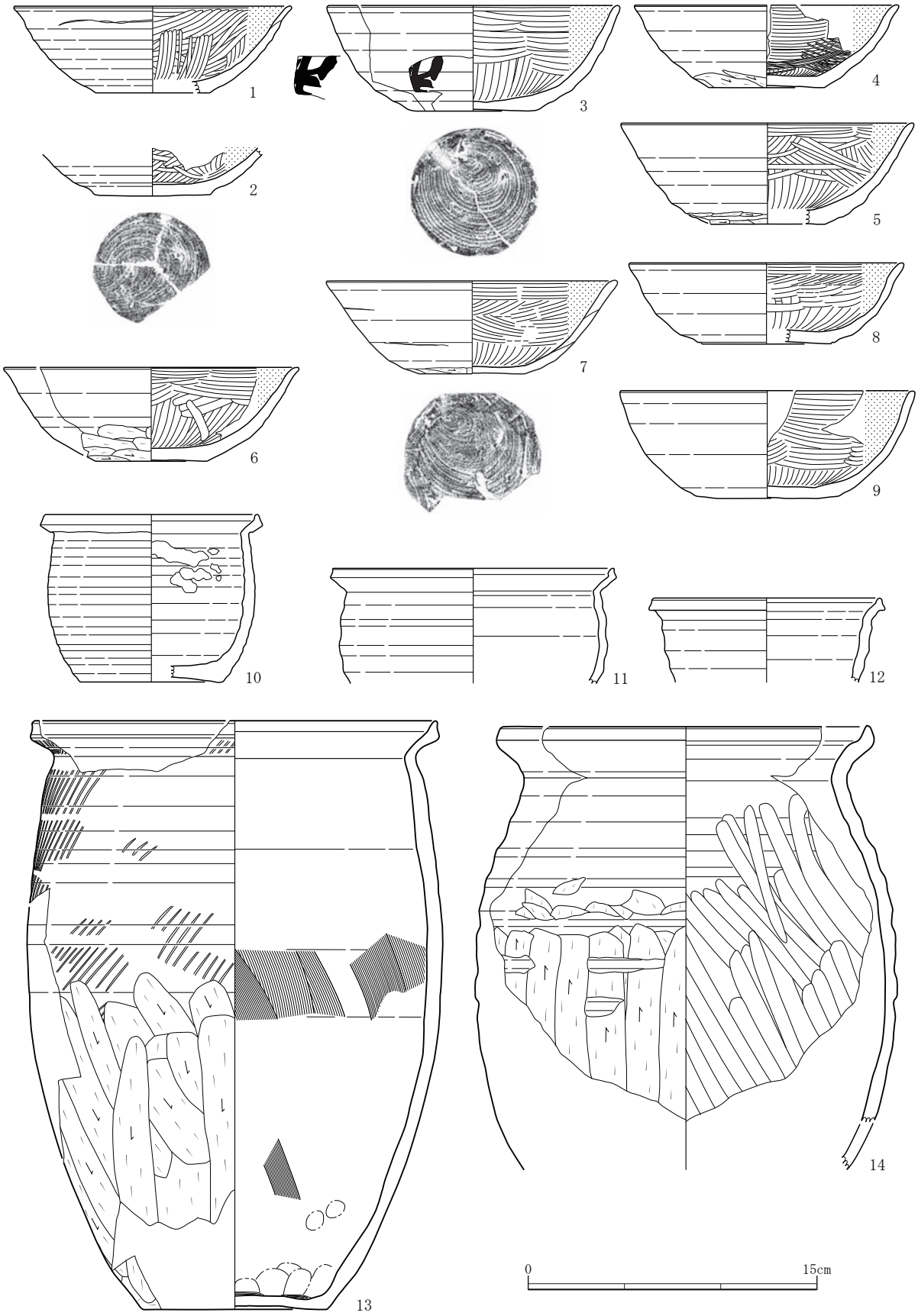
〔周溝〕断面はU字形で、壁は住居外側では直に立ち上がり、内側では緩やかである。最も深いのは外延溝につながる東辺南寄りで床面から約25cm あり、南西部は削平により失われている。周溝の堆積土はしまりのない土で、壁材の痕は認められず、抜き取りの可能性がある。また、外延溝と連絡することから、排水用の暗渠としても機能していた可能性がある。なお、周溝南東部分からは遺物が大量に出土している。

〔外延溝〕断面はU字形を呈し、深さは住居の床面から約30cm で、先端に向かってわずかに傾斜している。調査区際で撹乱によって壊されており、残存部分の長さは約250cmである。

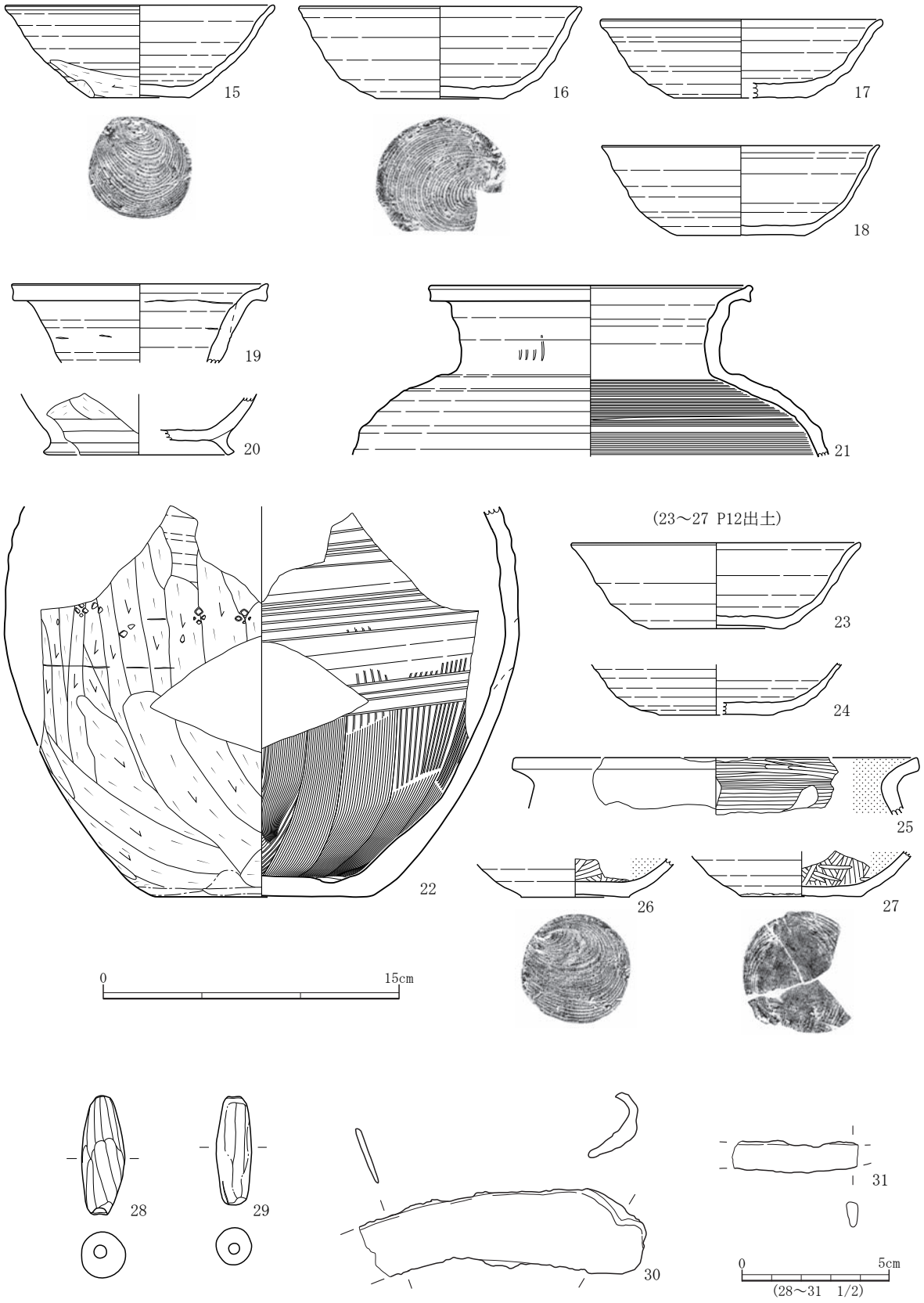
〔その他の遺構〕床面を検出した段階で、住居南側を中心に多数の土壙が確認された。P１～P11の堆積土は、住居や周溝の堆積土と同様にしまりがない。また、これらの土壙出土遺物には、他の土壙や住居・周溝の堆積土などから出土した遺物と接合関係が認められる。特に、P10からは遺物が多く出土し、カマドの構築材と考えられる被熱した礫や、スサ入りの焼土なども含まれている。よって、これらの土壙は住居廃絶時、あるいは廃絶後間もない段階に掘られたものと考えられる。一方、まったく異なる特徴を示すのがP12で、周溝に切られ、堆積土が非常に固くしまっていることから、古い段階に掘られたものと考えられる。

№	大きさcm	平面形	断面形	深さ	堆積土の特徴	遺物接合関係	新旧関係
P1	76～×67	楕円形	皿状	27	地山ブロック多い	P10、1層	P1→P2→P3
P2	76～×50～	楕円形	皿状	28		P3、1層	
P3	78×54	楕円形	皿状	24	焼土粒・炭化物多い	P2、1層	
P4	75×54	楕円形	皿状	25			
P5	80×64	楕円形	皿状	8		P10	
P6	64×60～	楕円形	皿状	13			
P7	50×48	円形	皿状	21			
P8	58～×51	楕円形	U字状	43		P10、外延溝、床、1層	P9→P8
P9	74～×60～	楕円形	U字状	37	焼土粒・炭化物非常に多い	周溝	
P10	93×88	円形	U字状	38	遺物多い、焼土・焼けた礫（カマドの構築材？）を含む	P1、P5、P8、周溝、外延溝、床、1層	
P11	64×64	円形	U字状	26			
P12	73×42～	楕円形	U字状	32	固くしまる、焼土ブロック・炭化物・地山ブロック多い	周溝	P12→周溝

表１　SI01内 土壙一覧表



第６図　SI01竪穴住居跡出土遺物①



第７図　SI01竪穴住居跡出土遺物②

No.	遺　物	層　位	法量cm			特　　徴	残存
			口径	底径	高さ		
1	土師器　坏	周溝	14.4	6.0	4.5	外：ロクロナデ　内：ミガキ－黒色処理　底：回転糸切	1/3
2	土師器　坏	P2＋P3＋1層	—	6.0	—	外：ロクロナデ　内：ミガキ－黒色処理　底：回転糸切	破片
3	土師器　坏	P8	15.0	6.5	5.5	外：ロクロナデ、墨書「□(市ヵ)」内：ミガキ－黒色処理　底：回転糸切	3/4
4	土師器　坏	P8	13.7	6.0	4.3	外：ロクロナデ　内：ミガキ－黒色処理　底：回転糸切－体下手持ちヘラケズリ	1/3
5	土師器　坏	P8＋床面	15.2	6.0	5.3	外：ロクロナデ　内：ミガキ－黒色処理　底：回転糸切り－底周縁～体下手持ちヘラケズリ	1/4
6	土師器　坏	P9	15.4	5.8	4.9	外：ロクロナデ　内：ミガキ－黒色処理　底：回転糸切－体下手持ちヘラケズリ	1/3
7	土師器　坏	P10	15.1	5.5	4.9	外：ロクロナデ　内：ミガキ－黒色処理　底：回転糸切－体下手持ちヘラケズリ	3/4
8	土師器　坏	P10	14.2	7.0	4.2	外：ロクロナデ　内：ミガキ－黒色処理　底：回転糸切	1/3
9	土師器　坏	P10	15.2	7.6	5.6	外：ロクロナデ　内：ミガキ－黒色処理　底：手持ちヘラケズリ	1/2
10	土師器　小型甕	周溝	11.0	7.4	8.7	内外：ロクロナデ、内面火ハネ痕あり 底：回転糸切	3/4
11	土師器　小型甕	周溝	14.6	—	—	内外：ロクロナデ	1/6
12	土師器　小型甕	P10＋床面	11.8	—	—	内外：ロクロナデ	1/6
13	土師器　甕	周溝	20.8	9.6	30.6	外：タタキ－ロクロナデ－体下ケズリ　内：ロクロナデ－ハケ目、オサエ	3/4
14	土師器　甕	周溝	18.8	—	—	外：ロクロナデ－体下ケズリ　内：ロクロナデ－ナデ	1/6
15	須恵器　坏	周溝	13.6	5.2	4.7	内外：ロクロナデ　底：回転糸切り－体下手持ちヘラケズリ	2/3
16	須恵器　坏	外延溝＋P8＋P10	14.2	6.4	4.7	内外：ロクロナデ　底：回転糸切	1/3
17	須恵器　坏	P10	14.4	6.8	4.0	内外：ロクロナデ　底：回転糸切	1/6
18	須恵器　坏	P10	14.2	6.6	4.6	内外：ロクロナデ　底：回転糸切	1/6
19	須恵器　壷	周溝	13.0	—	—	内外：ロクロナデ	破片
20	須恵器　壷？	周溝	—	9.1	—	外：手持ちケズリ－付け高台 内：ロクロナデ	破片
21	須恵器　壷	P9＋周溝	16.2	—	—	外：並行たたき－ロクロナデ　内：ロクロナデ(カキメ)	1/6
22	須恵器　甕	P10	—	11.4	—	外：タタキ－ロクロナデ－ケズリ 内：ハケ目ナデ－ロクロナデ(カキメ)　底：ナデ	1/6
23	須恵器　坏	P12	14.8	6.8	4.4	内外：ロクロナデ　底：回転糸切	1/2
24	須恵器　坏	P12	—	5.8	—	内外：ロクロナデ　底：回転糸切	1/4
25	土師器　鉢	P12	20.4	—	—	外：ロクロナデ、磨耗顕著　内：ミガキ－黒色処理	破片
26	土師器　坏	P12	—	5.5	—	外：ロクロナデ　内：ミガキ－黒色処理　底：回転糸切	破片
27	土師器　坏	1層	—	6.4	—	外：ロクロナデ　内：ミガキ－黒色処理　底：回転糸切－部分的なミガキ	破片
			長さ	幅	厚さ		
28	管状土錘	周溝	4.0	1.5	1.6	孔径4mm、重さ7ｇ、ナデ整形	完形
29	管状土錘	カクラン	3.7	1.2	1.3	孔径3.5mm、重さ4ｇ、ナデ整形、磨耗顕著	完形
30	鉄製品　鎌	1層	(8.7)	2.7	0.2	先端欠	2/3
31	鉄製品　刀子	1層	(4.2)	1.0	0.4	基部・先端欠	1/3

表２　SI01出土遺物観察表

〔遺物（第６～７図)〕床面からは少数の破片が出土したのみで、大半の遺物は土壙、周溝から出土している。23～27はP12の出土遺物で、それ以外はその他の土壙、周溝、堆積土などからの出土である。

１～９は土師器の坏である。すべてロクロ調整で、口径15cm、底径６cm、器高５cm 前後のものが主体である。底部の切り離しのわかるものはすべて回転糸切りで、体下部～底部周縁に手持ちヘラケズリを施すものも多く認められる（４～７)。内面のミガキは概して雑であり、部分的にロクロナデを残すものも見られる（３，７，８)。３は墨書土器で、欠損しているため明確でないが、逆位に「市」と書かれている可能性がある。４はミガキの一部が条線のようになっている。９は底面全体に手持ちケズリを施しており、底径7.6cm とやや大きい。

10～14は土師器の甕である。10～12は小型の甕で、10，11は外面にススが付着するなど、火にかけた痕跡が顕著である。12はＰ10と床面出土の破片が接合したもので、床面の破片には二次的な被熱が見られる。13はタタキの後ロクロナデで調整されている。14は他の甕に比べると口縁部形態などの作りが粗雑である。

15～18は須恵器の坏である。口径14cm、底径6.5cm、器高4.5cm 前後のものが主体である。底部はいずれも回転糸切りで、15は体下部に手持ちヘラケズリを施す。16はＰ８・Ｐ10と外延溝から出土した破片が接合したもので、Ｐ８・Ｐ10の破片は二次的に被熱している。

19～21は須恵器の壷、22は甕である。19は口縁部内面、20は外面全体に自然釉が付着している。20は体下部ケズリの後、高台を付けており、壷底部の可能性がある。21，22はタタキの後ロクロナデを

施している。22はロクロナデの前に、内面体下部にハケ目ナデを施している。

23～27はP12の出土遺物である。23，24は須恵器の坏で、底部はいずれも回転糸切りである。25は土師器の鉢で内面にヘラミガキと黒色処理を施している。26，27は土師器の坏で、27は底部回転糸切り後、部分的にミガキを施している。

28，29は管状土錘、30，31は鉄製の鎌、刀子である。

B　中近世

(1) 掘立柱建物跡・ピット群

【SA20a, b 柱穴列跡】（第３図）

〔位置〕１区中央部にある。

〔規模〕SA20aは３間で総長約5.4m、柱間寸法は南から約1.8m、1.9m、1.7mである。SA20bは２間で総長約3.5m、柱間寸法は南から約1.8m、1.7mである。この２列の柱穴列はほぼ平行しており、建物の可能性もある。

〔柱穴・柱痕跡〕柱穴の平面形は直径20～30cmの円形、不整な円形、または隅丸方形で、深さは確認面より16～39cmである。柱痕跡はすべての柱穴で認められ、直径約10cmの円形である。堆積土は、掘り方埋土が地山ブロックを含む暗褐色や褐色のシルトまたは粘土、柱痕跡が黒褐色や暗褐色のシルトである。

〔方向〕SA20aはN－11°－W、SA20bはN－４°－Wである。

【SA21柱穴列跡】（第３図）

〔位置〕１区の西端にあり、調査区の西側へ広がる建物の可能性がある。

〔規模〕３間で総長約5.4m、柱間寸法は南から約2.2m、1.2m、2.0mである。

〔柱穴・柱痕跡〕柱穴の平面形は直径20～30cmの円形または隅丸方形で、深さは確認面より16～45cmである。柱痕跡はすべての柱穴で認められ、直径10～12cmの円形である。堆積土は、掘り方埋土が地山ブロックを含む暗褐色シルト、柱痕跡が黒褐色シルトである。

〔方向〕N－12°－Wである。

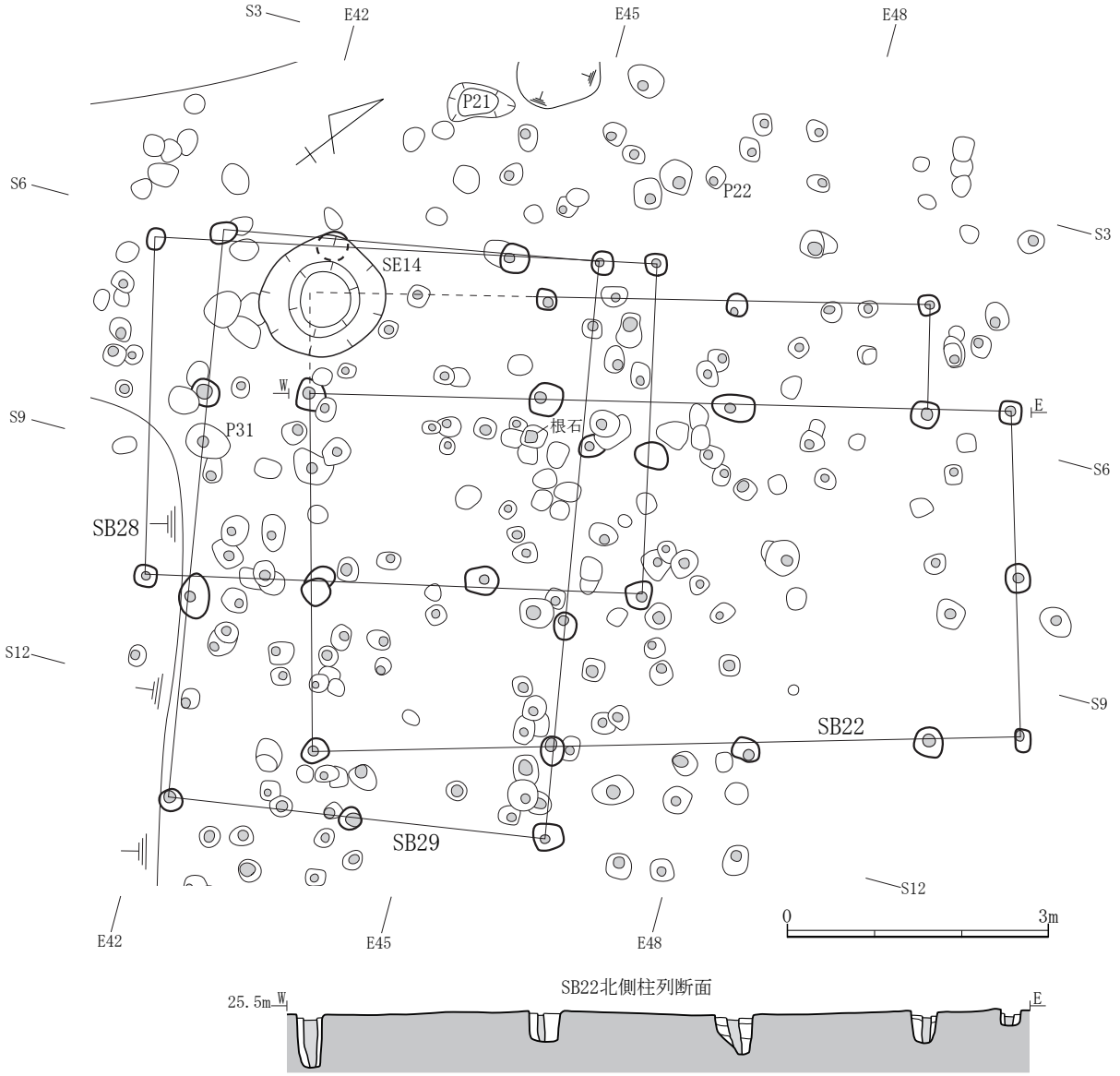
【SB22掘立柱建物跡】（第８図）

〔位置・重複〕３区中央部北西寄りにあり、SE14と重複し、これより古い。また、位置的にSB28・SB29とも重複するが、新旧関係は不明である。

〔構造〕東西４間、南北２間の東西棟建物跡で、北側に廂もしくは縁を持つ可能性がある。

〔規模〕身舎の桁行は北側柱列で総長約8.0m、柱間寸法は西から約2.6m、2.2m、2.3m、0.9mである。梁行は東妻で総長約3.8m、廂の出は約1.2mである。

〔柱穴・柱痕跡〕柱穴は身舎で12個、廂で３個検出し、１箇所を除いて柱痕跡が認められた。柱穴の平面形は、長軸25～50cm、短軸20～40cmの楕円形や隅丸方形で、深さは確認面より12～65cmである。



第８図　SB22・SB28・SB29掘立柱建物跡（1／80）

柱痕跡は直径10～15cm の円形である。堆積土は、掘り方埋土が地山ブロックを含む黒褐色や明黄褐色のシルトで、柱痕跡が黒色や黒褐色のシルトである。

〔方向〕北側柱列でＮ－39°－Ｅである。

【SB28掘立柱建物跡】（第８図）

〔位置・重複〕３区中央部北西寄りにあり、SE14と重複し、これより古い。また、位置的にSB22・SB29とも重複するが新旧関係は不明である。

〔構造〕東西３間、南北２間の東西棟建物である。

〔規模〕桁行は南側柱列で総長約5.7m、柱間寸法は西から約2.0m、1.9m、1.8mである。梁行は東

妻で約2.8mである。

〔柱穴・柱痕跡〕柱穴は９個検出し、うち５箇所で柱痕跡が認められた。柱穴の平面形は長軸25～40cm、短軸20～35cmの隅丸方形もしくは不整な円形で、深さは確認面より23～65cmである。柱痕跡は直径10～12cmの円形である。堆積土は、掘り方埋土が地山ブロックを含む黒色、黒褐色、灰黄褐色のシルト、柱痕跡は黒色や黒褐色のシルトである。

〔方向〕南側柱列でＮ－39°－Ｅである。

【SB29掘立柱建物跡】（第８図）

〔位置・重複〕３区中央部北西寄りにあり、位置的にSE14、SB22・28と重複するが新旧関係は不明である。

〔構造〕南北３間、東西２間の南北棟建物である。

〔規模〕桁行は西側柱列で総長約6.5m、柱間寸法は北から約1.9m、2.3m、2.3mである。梁行は南妻で約4.3mである。

〔柱穴・柱痕跡〕柱穴は９個検出し、うち８箇所で柱痕跡が認められた。柱穴の平面形は長軸25～50cm、短軸25～35cmの隅丸方形もしくは不整な円形で、深さは確認面より38～68cmである。柱痕跡は直径10～15cmの円形である。堆積土は、掘り方埋土が地山ブロックを含む黒褐色や暗褐色のシルト、柱痕跡は黒褐色のシルトである。

〔方向〕東側柱列でＮ－45°－Ｗである。

【SB23掘立柱建物跡】（第９図）

〔位置〕３区中央部北東寄りにある。

〔構造〕南北４間、東西１間の南北棟建物跡である。

〔規模〕桁行は東側柱列で総長約9.3m、柱間寸法は北から約2.1m、2.5m、2.3m、2.4mである。梁行は北妻で約4.2mである。

〔柱穴・柱痕跡〕柱穴は10個検出し、すべて柱痕跡が認められた。柱穴の平面形は長軸25～35cm、短軸20～30cmの不整な円形で、深さは確認面より14～45cmである。柱痕跡は直径約10cmの円形である。堆積土は、掘り方埋土が地山ブロックを含む黒褐色シルト、または地山ブロック主体のにぶい黄褐色粘土で、柱痕跡は黒褐色のシルトである。

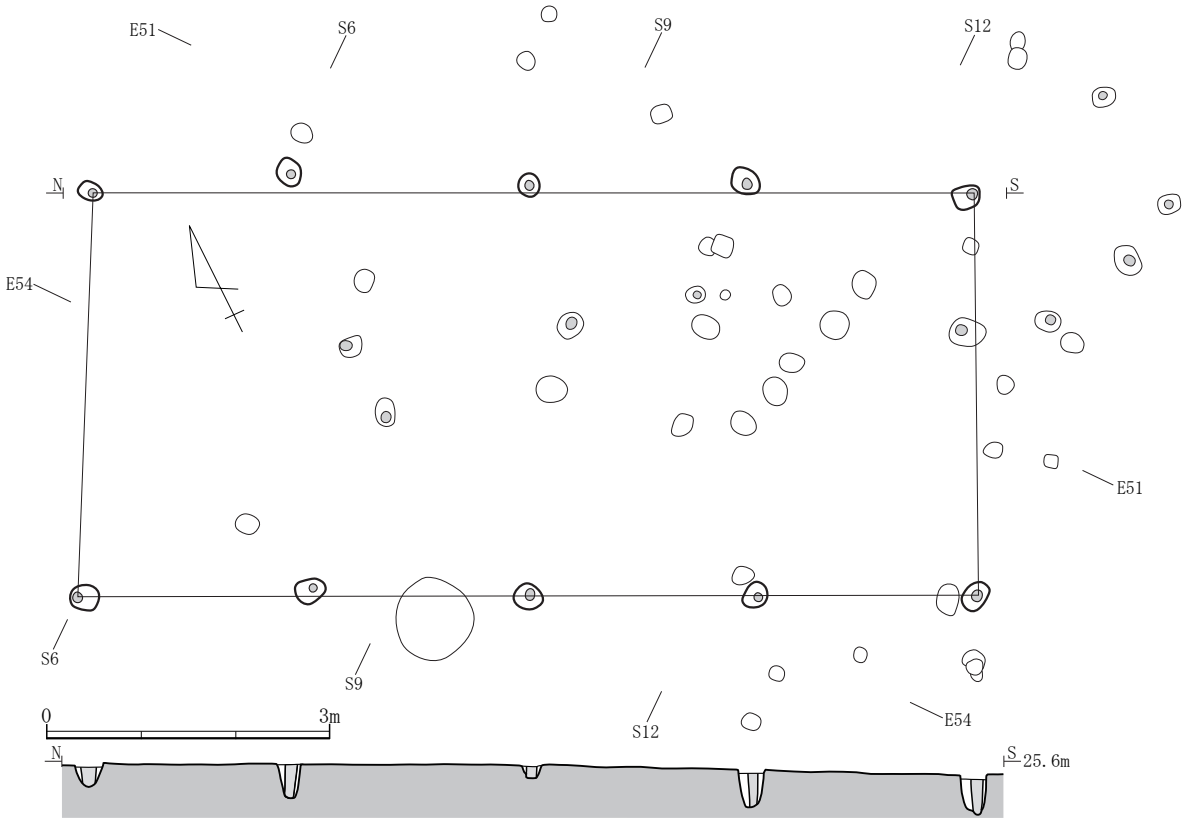
〔方向〕北妻でＮ－28°－Ｅである。

【SB24掘立柱建物跡】（第10図）

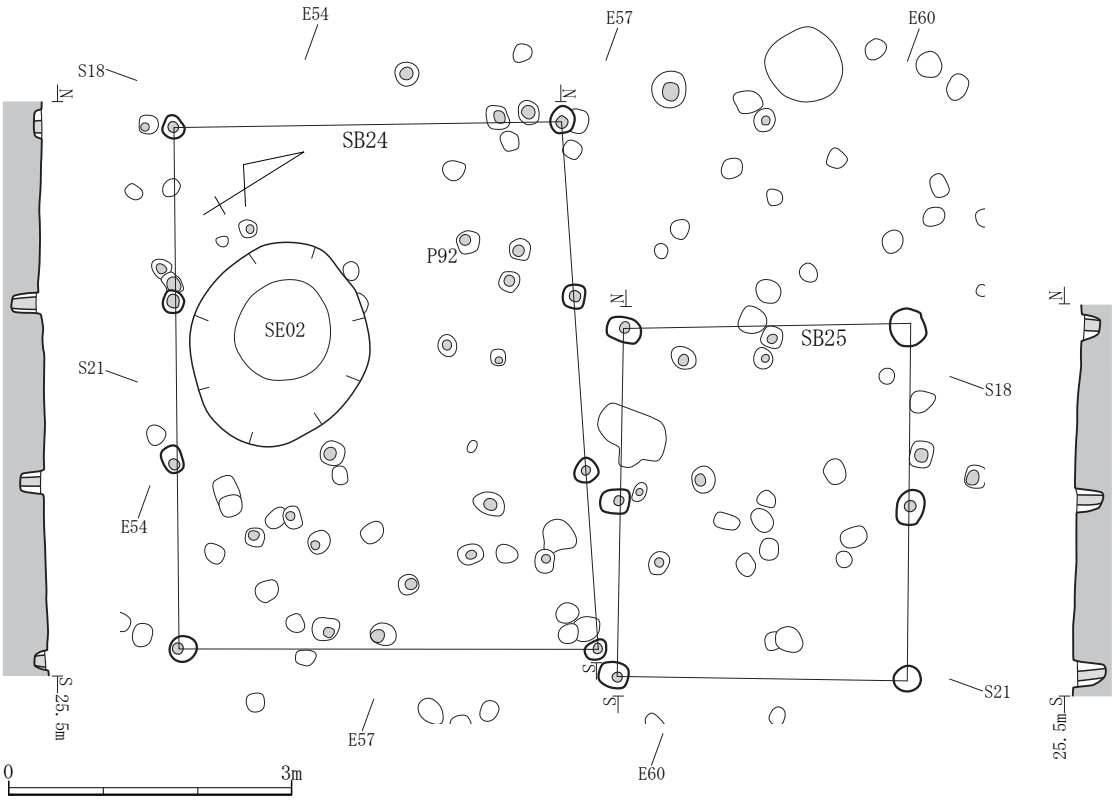
〔位置・重複〕３区中央部南東寄りにあり、位置的にSE02と重複するが、新旧関係は不明である。

〔構造〕南北３間、東西１間の南北棟建物である。

〔規模〕桁行は東側柱列で総長約5.6m、柱間寸法は北から約1.8m、1.9m、1.9mである。梁行は北妻で約4.0mである。



第９図　SB23掘立柱建物跡（1／80）



第10図　SB24・SB25掘立柱建物跡（1／80）

〔柱穴・柱痕跡〕柱穴は８個検出し、すべて柱痕跡が認められた。柱穴の平面形は長軸25～35cm、短軸20～30cmの不整な円形もしくは隅丸方形で、深さは確認面より11～32cmである。柱痕跡は直径10～15cmの円形である。堆積土は、掘り方埋土が地山ブロックを多く含む灰黄褐やにぶい黄褐色のシルト、柱痕跡が黒褐色や灰黄褐色のシルトである。

〔方向〕北妻でＮ－32°－Ｅである。

【SB25掘立柱建物跡】（第10図）

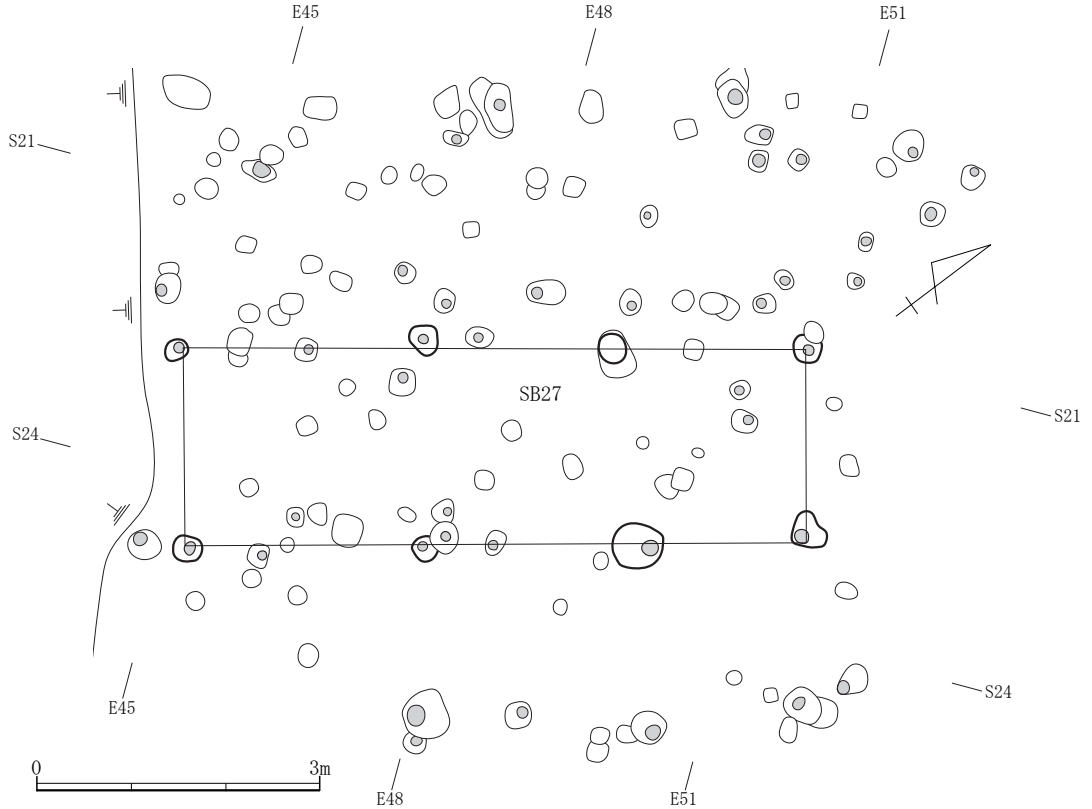
〔位置・重複〕３区中央部南東寄りにあり、SI01と重複し、これより新しい。

〔構造〕南北２間、東西１間の南北棟建物である。

〔規模〕桁行は西側柱列で総長約3.7m、柱間寸法は北から約1.8m、1.9mである。梁行は北妻で約3.0mである。

〔柱穴・柱痕跡〕柱穴は６個検出し、うち４箇所で柱痕跡が認められた。柱穴の平面形は長軸30～40cm、短軸25～35cmの不整な円形もしくは隅丸方形で、深さは確認面より18～37cmである。柱痕跡は直径約10cmの円形である。堆積土は、掘り方埋土が地山ブロックを含む黒褐色や灰黄褐色のシルト、柱痕跡が黒褐色のシルトである。

〔方向〕北妻でＮ－32°－Ｅである。



第11図　SB27掘立柱建物跡（1／80）

【SB27掘立柱建物跡】（第11図）

〔位置〕３区中央部南西寄りにある。

〔構造〕東西３間、南北１間の東西棟建物である。

〔規模〕桁行は北側柱列で総長約6.6m、柱間寸法は西から約2.5m、2.0m、2.1mである。梁行は西妻で約2.1mである。

〔柱穴・柱痕跡〕柱穴は10個検出し、うち８箇所で柱痕跡が認められた。柱穴の平面形は長軸30～55cm、短軸25～50cm の楕円形もしくは不整な円形で、深さは確認面より21～69cm である。柱痕跡は直径10～15cm の円形である。堆積土は、掘り方埋土が地山ブロックを含む黒褐色シルト、柱痕跡は黒褐色のシルトである。

〔方向〕北側柱列でＮ－37°－Ｅである。

【その他のピットと出土遺物】（第３図・第４図・第14図）

上記の掘立柱建物跡以外にも、１区～３区で多数のピットが検出されている。柱痕跡を残すものが多いことなどから大部分は柱穴で、削平された部分も含めてさらに多くの建物があったと考えられる。

３区のピットからは中世陶磁器が出土している（第14図１～４）。１は白磁の壷の底部破片で、SB24の周辺のピットから出土した。体部外面に瓜形の凹凸を有し、底面以外の外面及び内面全体に薄い青みを帯びた釉が施されている。高野山奥之院などに出土例があり、時期は南宋時代12～13世紀とされる（小山1975）。２～４はSB22の周辺のピットから出土した。２は瀬戸産灰釉陶器の瓶子の破片で、外面に唐草文状の文様が描かれている。古瀬戸後Ⅰ期に位置づけられ、時期は14世紀後葉とされる（藤澤2005、愛知県史編さん委員会2007）。３，４は瓷器系陶器の擂鉢の破片で、４は体下部に手持ちケズリを施した後、高台を付けている。胎土・色調などから、東海諸窯からの搬入品というよりも、その影響を受けた在地の窯で生産された可能性が高い。高台付きの擂鉢の生産遺跡は県内では今のところ知られていないが、福島県梁川町の八郎窯跡の製品が13世紀前半～中頃に位置づけられており（菅野2003）、４も近い時期であろう。

(2) 溝跡

【SD05溝跡】（第４図、第12図）

〔位置〕３区中央部西寄りにあり、SE06と重複し、これより新しい。

〔規模・形態〕北東から南西方向へやや湾曲しながら延びる溝跡で、両端とも削平を受けている。検出長は約10.8m、最大で幅約2.1m、深さ約0.3mで、壁は緩やかに立ち上がる。

〔方向〕Ｎ－41°－Ｅである。

〔堆積土〕１層認められた。暗褐色シルトの自然流入土である。

〔遺物〕堆積土から陶器の皿の破片が出土している（第14図５）。波状の口縁と凹凸のある体部から「菊皿」で、胎土・釉調から桃山陶器（志野）と考えられる。

〔性格〕SB22・SB27・SB28と方向が一致することから、区画溝の可能性がある。

【SD08溝跡】（第３図、第12図）

〔位置〕１区中央部に位置する。

〔規模・形態〕南から北方向へ延びる溝跡で、北側は撹乱によって壊され、南側は調査区外へ続いている。検出長は約20.8m、最大で幅約1.9m、深さ約0.6mで、断面は逆台形状を呈するが、西壁の立ち上がりはやや緩やかである。

〔方向〕N－13°－Wである。

〔堆積土〕６層に分けられ、すべて自然堆積である。断面観察から大きく３層に大別され、ある程度土が堆積した段階で、２度にわたって掘り返されたと考えられる。

〔遺物〕堆積土から陶器の小型壷の底部破片が出土している（第14図６）。無釉で、内面には多量の鉄分が付着している。

〔性格〕この溝の西側からは３本の柱穴列を含む多数のピットが分布しており、東側からはまったくピットが検出されなかったことから、これらのピット群（建物群）を囲む区画施設であったと考えられる。

【SD18溝跡】（第４図、第12図）

〔位置・重複〕３区北部に位置する。一部のピットと重複し、これより新しい。

〔規模・形態〕北東から南西方向へ延びる溝跡で、両端とも削平を受けている。中央部も撹乱によって壊されているが、ひと続きの溝跡と捉えた。検出長は約28.8m、最大で幅約2.0m、深さ約0.4mで、壁は緩やかに立ち上がる。

〔方向〕N－36°－Eである。

〔堆積土〕３層に分けられ、黒褐色シルトが自然堆積している。

〔遺物〕堆積土から近世陶磁器の破片が出土している（第14図７～９）。

〔性格〕この溝の南側からは７棟の掘立柱建物跡を含む多数のピットが分布しており、北側からはほとんどピットが検出されなかったことから、これらのピット群（建物群）を囲む区画施設であったと考えられる。

(3) 井戸跡

【SE02井戸跡】（第12図）

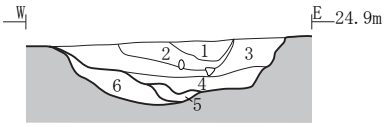
〔位置・重複〕３区中央部南東寄りにあり、位置的にSB24と重複するが、新旧関係は不明である。

〔規模・形態〕井戸枠等は検出されておらず、素掘りの井戸である。平面形は、上面が長軸約2.2m、短軸約1.9mの楕円形で、底面は直径約１mの円形である。深さは確認面より約1.1mで、断面は漏斗形を呈する。

〔堆積土〕８層に分けられ、すべて自然堆積である。

〔遺物〕堆積土から土師器・須恵器が出土しているが、いずれも小片で磨耗している。

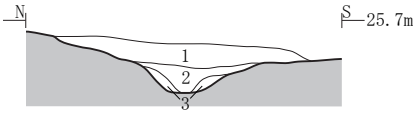
SD08



SD08

層	土　　色	土　性	備　　考
1	灰黄褐(10YR4/2)	シルト	
2	灰黄褐(10YR4/3)	シルト	地山ブロック小～中を多く含む。
3	暗褐(10YR3/3)	シルト	地山ブロック含む。粘性あり。黒味強い部分あり。
4	黒褐(10YR3/2)	粘質シルト	地山ブロック小～中を中量含む。
5	黒褐(10YR3/1)	粘質シルト	砂混じり。
6	にぶい黄褐(10YR5/3)	粘質シルト	地山ブロック大を中量含む。

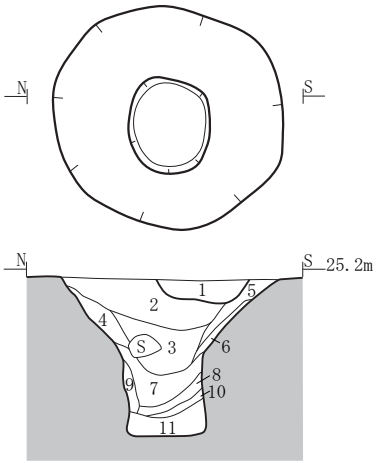
SD18



SD18

層	土　　色	土　性	備　　考
1	黒褐(10YR3/2)	シルト	炭化物をわずかに含む。
2	黒褐(10YR2/2)	シルト	1層より黒味強。地山ブロック小・炭化物わずか。
3	黒褐(10YR2/2)	シルト	地山ブロック小を多く含む。

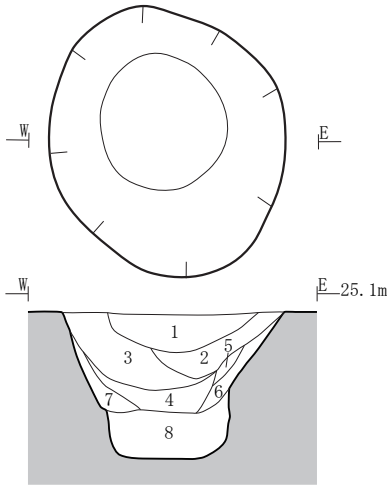
SD05, SE06



SD05・SE06

層	土　　色	土　性	備　　考
1	暗褐(10YR3/3)	シルト	SD05堆積土。地山ブロック小を少量含む。
2	黒褐(10YR2/3)	シルト	地山ブロック小～中を中量、炭化物を少量含む。
3	黒褐(10YR2/3)	シルト	地山ブロック小・炭化物を少量含む。
4	黒褐(10YR3/2)	シルト	地山ブロック小～中を多く含む。
5	黒褐(10YR3/2)	シルト	地山ブロック小を多く含む。
6	黒褐(10YR2/2)	シルト	地山を層状に含む。壁面の崩落土。
7	黒(10YR2/1)	粘質シルト	地山ブロック小～中を中量、炭化物を少量含む。
8	黒褐(10YR3/1)	粘質シルト	地山ブロック大を多く含む。
9	にぶい黄橙(10YR6/4)	粘質シルト	地山崩落土。
10	にぶい黄橙(10YR6/3)	粘質シルト	
11	黒(10YR2/1)	粘質シルト	地山ブロック小を少量含む。

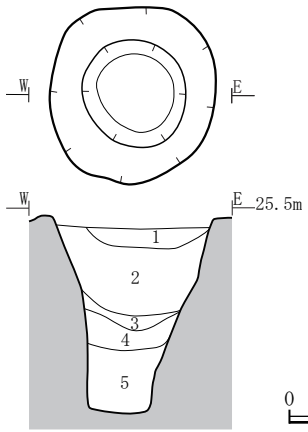
SE02



SE02

層	土　　色	土　性	備　　考
1	黒褐(10YR2/3)	シルト	地山ブロック小をわずかに含む。
2	黒褐(10YR2/3)	シルト	地山ブロック小を少量、炭化物を少量含む。
3	黒褐(10YR2/3)	シルト	地山ブロック中を中量、炭化物をわずかに含む。
4	暗褐(10YR3/3)	粘質シルト	
5	黒褐(10YR3/1)	シルト	地山ブロック小をわずかに含む。
6	黒褐(10YR3/1)	シルト	地山ブロック小を中量含む。
7	褐(10YR4/4)	砂質シルト	4層を中量含む。
8	黒褐(10YR3/2)	粘質シルト	地山粒をわずかに含む。

SE14



SE14

層	土　　色	土　性	備　　考
1	黒褐(10YR3/2)	シルト	地山ブロック小・炭化物をわずかに含む。
2	暗褐(10YR3/3)	シルト	地山ブロック大多量、炭化物わずか。人為埋土。
3	黒(10YR2/1)	シルト	地山ブロック小わずか。壁際に大きな地山ブロック。
4	黄橙(10YR8/6)	粘質シルト	地山土に近い。
5	黒褐(10YR2/2)	粘質シルト	壁際に地山崩落土を層状に含む。下半部グライ化。

0　　3m

第12図　SD05・08・18溝跡, SE02・06・14井戸跡（1／60）

【SE06井戸跡】（第12図）

〔位置・重複〕３区中央部にあり、SD05と重複し、これより古い。

〔規模・形態〕井戸枠等は検出されておらず、素掘りの井戸である。平面形は、上面が直径約1.8m、底面が直径約0.6mでいずれも不整な円形である。深さは確認面より約1.2mで、断面は漏斗形を呈する。

〔堆積土〕10層に分けられ、すべて自然堆積である。

【SE14井戸跡】（第12図）

〔位置〕３区中央部北西寄りにあり、SB22・28と重複し、これより新しい。また、位置的にSB29とも重複するが、新旧関係は不明である。

〔規模・形態〕井戸枠等は検出されておらず、素掘りの井戸である。平面形は、上面が直径1.3～1.4m、底面が直径約0.6mでいずれも不整な円形である。深さは確認面より約1.6mで、断面形は漏斗形に近いが、上部の広がりが小さい。

〔堆積土〕５層に分けられる。３～５層が自然堆積した後、大きな地山ブロックを多量に含む２層で人為的に埋められ、窪んだところに１層が自然堆積したと考えられる。

C　その他の遺構・遺物

(1) 土壙跡

【SK13土壙跡】（第13図）

〔位置〕３区北西

〔規模・形態〕平面形は、上面が長軸1.2m、短軸0.8m、底面が長軸0.8m、短軸0.4mでいずれも楕円形を呈する。深さは確認面より0.8m、壁は凹凸を持ちながら急に立ち上がる。

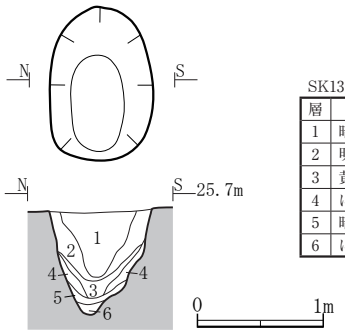
〔堆積土〕６層に分けられ、すべて自然堆積である。

〔遺物〕出土していない。

〔性格〕陥穴と考えられる。

(2) 縄文時代の遺物（第14図10，11）

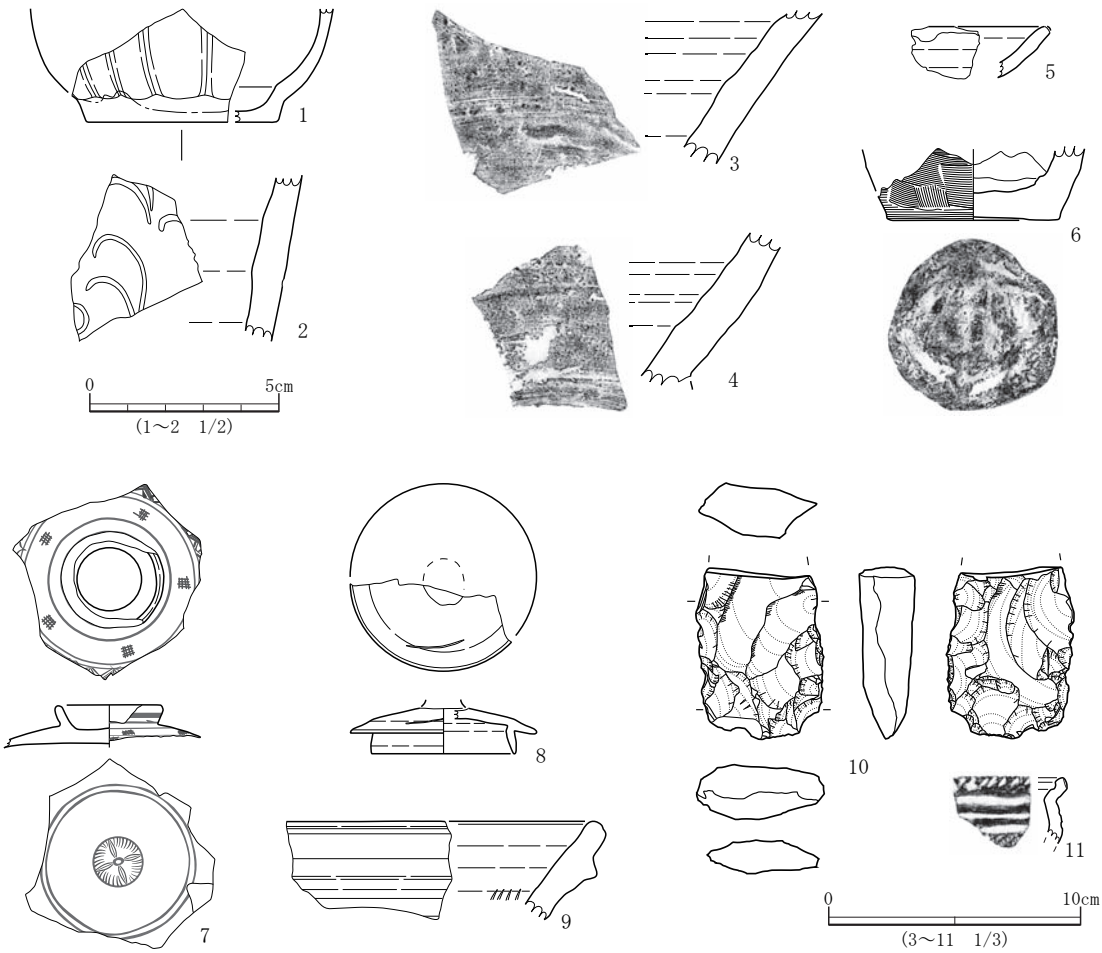
少量の縄文土器・石器が、表土や別時代の遺構から出土している。10は短冊形の打製石斧で、基部は欠損している。石材は安山岩もしくは流紋岩と考えられ、表面は風化が顕著である。11は浅鉢形土器の口縁部破片で、縄文晩期大洞Ｃ２式と考えられる。



SK13

層	土　　色	土　性	備　　考
1	暗褐(10YR3/4)	シルト	地山ブロック小を少量、炭化物をやや多く含む。
2	明黄褐(10YR6/6)	粘質シルト	暗褐シルトを薄い層状に含む（中央に向かってくぼむ）、炭化物少量含む。
3	黄褐(10YR5/6)	粘質シルト	地山ブロックを多量、炭化物を少量含む。下部はややグライ化。
4	にぶい黄橙(10YR6/4)	粘質シルト	炭化物をわずかに含む。地山崩落土か。
5	暗褐(10YR3/3)	粘質シルト	地山ブロック小・炭化物を少量含む。
6	にぶい黄褐(10YR5/3)	粘質シルト	

第13図　SK13土壙跡（1／60）



No.	遺　　物	出土遺構	備　　考
1	白磁　壷	3区－P92(第10図)	底径5.0cm、残存高3.0cm、瓜形、胎土白色、内外面(底面以外)に薄い青みを帯びた釉
2	灰釉陶器　瓶子	3区－P31(第8図)	古瀬戸、唐草文か
3	瓷器系陶器　擂鉢	3区－P21(第8図)	表面は暗赤褐色、砂粒多い
4	瓷器系陶器　擂鉢	3区－P22(第8図)	体下部手持ちケズリ－付け高台、表面は暗褐色(内面下部のみ明褐色)、砂粒多い
5	陶器　皿	SD05	志野菊皿、長石釉
6	陶器　小型壷	SD08	底径6.8cm、外面ナデ調整、内面に鉄分付着
7	磁器　蓋	SD18	リング状のつまみ、呉須による染め付け
8	陶器　蓋	SD18	つまみ欠損
9	陶器　すり鉢	SD18	無釉、表面黒褐色
10	打製石斧	SD18	基部欠損、長さ6.9cm、幅5.1cm、厚さ2.2cm、安山岩もしくは流紋岩か、表面風化
11	縄文土器　浅鉢	SI01－1層	晩期大洞C2式、LR磨消縄文、口唇上刻み、内面沈線1条

第14図　ピット・溝跡・その他の出土遺物

第Ⅳ章　まとめ

(1) 古代

SI01竪穴住居跡の調査で、周溝や土壙から土師器・須恵器が比較的まとまって出土した。P12以外の土壙は住居廃絶直後に掘られたと考えられ、相互に接合関係の認められるものも多くあることから、ほぼ同時期のものと考えられる。未報告の破片も含め、全体として以下のような特徴が挙げられる。

- 土師器は基本的にロクロを用いている。
- 須恵系土器は認められない
- 坏の底部は、土師器・須恵器とも回転糸切り無調整か手持ちケズリが多数で、ヘラ切りはごくわずかの破片に見られるのみである。
- 坏の底径は土師器5.5～７cm、須恵器５～７cm程度が主体で、いずれも口径の半分以下である。
- 土師器の甕で、タタキ→ロクロ調整を施すものが一定量認められる。

類似する様相をもつ一括出土例としては、色麻古墳群第15号住居跡（宮教委1984）、中峯Ａ遺跡第10号住居跡（宮教委1985）などが挙げられ、おおよそ９世紀中葉～後葉に位置づけられる。なお、古い段階に掘られたP12出土土器と、廃絶後と考えられるその他の土器に、器形・調整などの点で明瞭な差は認められない。よって、住居についても上記と同じ時期と考えてよいであろう。

今回の調査ではSI01以外に古代の遺構は検出されていない。調査区南側へ集落が展開していた可能性はあるが、比較的小規模な集落だったと考えられる。

(2) 中近世

１区と３区において、多数の掘立柱建物跡・ピットとそれらを区画する溝が検出されたことから、屋敷跡の遺構と考えられる。１区のピット群はSD08に、３区のピット群はSD05やSD18に区画されており、両者は別のまとまりを形成している。

３区のピットからは中世陶磁器が４点出土しており、屋敷跡の年代は中世までさかのぼると考えられる。中世陶磁器の生産年代は12～14世紀とばらつきがあるが、白磁の壷は中世のこの地域ではほとんど類例のない貴重な品といえるので、伝世していた可能性もある。また、このような遺物から屋敷の住人がある程度身分の高い者であったと推測できる。

また、３区のピット群を区画する溝からは、桃山陶器１点（SD05）、近世陶磁器３点（SD18）が出土している。ピットからこれらの時期に対応する遺物は出土していないが、表土に近世陶磁器が含まれていることや、多数の掘立柱建物跡・ピットが存在することから、中世～近世にかけて、継続的もしくは断続的に屋敷地が営まれたと考えられる。

今回の調査では撹乱による制約もあって詳細な建物構造の把握は困難だが、SB22・SB28・SB29付近には最も多くのピットが集中しており、大きさ・深さなどの点でも良好な柱穴が多い。よって、ここに中心となる建物が存在した可能性が高く、周辺にSB23～25・SB27などの付属的な建物があったと考えられる。

【参考文献】

愛知県史編さん委員会　2007　『愛知県史』別編　窯業２　中世・近世　瀬戸系

大衡村教育委員会　1995　『亀岡遺跡』大衡村文化財調査報告書　第１集

菅野崇之　2003　「八郎窯跡」『中世奥羽の土器・陶磁器』東北中世考古学会編　高志書院

小山富士夫　1975　「高野山奥之院出土陶片について」『高野山奥之院の地寶』和歌山県文化財学術調査報告書　第六冊

藤澤良祐　2005　「施釉陶器生産技術の伝播」『全国シンポジウム　中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～　発表要旨集』

宮城県教育委員会　1984　「色麻古墳群」『宮城県営圃場整備関連遺跡詳細分布調査報告書』宮城県文化財調査報告書第100集

宮城県教育委員会　1985　『中峯遺跡発掘調査報告書』宮城県文化財調査報告書　第108集

宮城県教育委員会　1990　「天皇寺遺跡」『寂光寺跡ほか』宮城県文化財調査報告書　第135集

宮城県教育委員会　1999　『一里塚遺跡－第44・47次発掘調査報告書－』宮城県文化財調査報告書　第179集

宮城県教育委員会　2007　「旧大衡役場前遺跡」『東北地方整備局関連遺跡発掘調査報告書』宮城県文化財調査報告書第211集

調査区全景（北東から）

３区全景（南西から）

図版１

１区全景（南西から）

SI01竪穴住居跡（北から）

SB22掘立柱建物跡（北東から）

図版２

SB23掘立柱建物跡（北西から）

SB24掘立柱建物跡（北西から）

SB25掘立柱建物跡（北西から）

図版３

SB24柱穴断面

SB25柱穴断面

SA21柱穴断面

SD08溝跡（南から）

SD18溝跡（北東から）

SE02井戸跡断面（南から）

SE06井戸跡断面（南西から）

図版４

第６図－３

第６図－４

第６図－３（墨書）

第６図－７

第７図－15

第７図－16

第７図－23

第６図－10

第６図－13

図版５　SI01出土土器

SI01出土　土製品・鉄製品

縄文時代の出土遺物

陶磁器（第14図）

図版６

報　告　書　抄　録

ふりがな	たいらばやしいせき
書　　名	平林遺跡
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	宮城県文化財調査報告書
シリーズ番号	第215集
著 者 名	初鹿野博之
編集機関	宮城県教育委員会
所 在 地	〒980－8423　宮城県仙台市青葉区本町三丁目８－１　TEL 022－211－3685
発行年月日	西暦2008年３月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード		世界測地系		調査期間	調査 面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
たいらばやしいせき 平林遺跡	くろかわぐんおおひらむらおおひらあざたいらばやし 黒川郡大衡村大衡字平林	44245	26029	38° 27′ 59″	140° 52′ 38″	2007.5.7 ～6.18	約2,000m²	主要地方道大衡落合線道路改良事業に伴う事前調査

所収遺跡名	種　　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平林遺跡	集落跡	古代	竪穴住居跡１軒	土師器・須恵器・土製品・鉄製品	
	屋敷跡	中近世	掘立柱建物跡７棟、溝跡３条、井戸跡３基、ピット群	陶磁器	

要　　約	平林遺跡は、宮城県黒川郡大衡村南部の丘陵端部に位置する遺跡である。今回の調査では古代の竪穴住居跡１軒、中近世の掘立柱建物跡、溝跡、井戸跡、多数のピットなどを検出した。竪穴住居跡は、出土遺物から９世紀中葉～後葉に位置づけられ、調査区周辺に小規模な集落が展開していたと考えられる。中近世の遺構は、多数の掘立柱建物跡やピット群とそれらを区画するような溝があることから、屋敷地であったと考えられる。また、これらの遺構から中近世の陶磁器が出土しており、特に中国産の白磁の壷（12～13世紀）や、瀬戸産の灰釉陶器の瓶子（14世紀後葉頃）は、周辺の遺跡ではほとんど類例のないものである。文献史料の少ないこの地域の中世社会を探るうえで貴重な手がかりを得ることができた。

宮城県文化財調査報告書第215集

平林遺跡

平成20年３月21日印刷
平成20年３月25日発行

発　行　宮 城 県 教 育 委 員 会
仙台市青葉区本町三丁目８番１号
印　刷　株式会社　東 北 プ リ ン ト
仙台市青葉区立町24－24